

## 準備委員会企画シンポジウム

### I 発達研究のパラダイムの探索

#### ——よりよき人間理解を目指して——

企画者 藤永 保 (お茶の水女子大学)  
 司会者 " ( " )  
 話題提供者 岩立志津夫 (信州大学)  
 河合 優年 (三重大学)  
 川村久美子 (東横学園女子短大)  
 氏家 達夫 (福島大学)

#### 主 旨

藤永 保

筆者が大学を卒業した当時は、まだ「発達心理学」という名称は内外ともにほとんどきかれることがなく、もっぱら児童心理学が用いられていた。こうした動向そのものが象徴的ともいえるが、当時は多くの専典に発達心理学と児童心理学は相互に混用されると記されており、歴史的伝統からみて「児童心理学」がむしろ本道であると考えられていたことは疑いない。

こうした情勢に変化が起り始めたのは、おそらく1950年代の後半から60年代にかけてであろう。その余波は未だつづいており、我々自身も歴史のなかにいるわけであるから、何がパラダイム変革の主因をなしたかを見定めるのは難しい。おそらく、それは1つではなく多くのものが期せずして一斉に働いたのであろう。少し考えてみただけでも、たとえば、ピアジェの業績が徐々に英語圏の心理学界にも浸透し、それまで研究不能と考えられていた早い年代にも実証的解明の可能性があることが確かめられたなどが1つの直接契機をなしたことは判断に難くない。

その認知発達理論の壮大な卓拔さがこれに伴って広く知られるに至り、発達研究の理論的可能性にブルーナーを始めとする多くの優れた研究者が魅きつけられたことは第1に挙げなければならない。しかし、それ以外にも比較行動学・大脳生理学・小児科学など隣接諸科学の目覚ましい発展に伴い、特に初期発達が大きな可塑性と未知の可能性をはらむことが知られてきたのも劣らず大きい。さらには、アメリカにおける公民権運動の高まりから従来のように人種間の遺伝的知能差を暗に肯定しそれを階層秩序の根底においてきた伝統的観念が激しい批判と攻撃の嵐に襲われたといった外廻りの事情も無視は

しえないであろう。

かくして、エンドラーらは変化の方向を、自然観察から実験的分析へ、発達過程(成熟)の不変性—文化軽視の観念から比較文化的研究へ、遺伝か環境かから相互作用論へというほぼ3つの柱に集約されるとした。この指摘はおおむね的を射ていたと思われるのだが、その後の情勢を振り返ると、かくして始まった革新の動きは至るところに波及し質量ともに目ざましい多くの業績を生みだしたといえるだろう。「発達心理学」はこの変革の動向を表現する名称といえるが、いまやすっかり一種の正統派の地位を固めたようにもみえる。クーンのいうような意味では、発達心理学は平常科学としての安定期を迎えているといえないでもない。

しかし、それなら安心してよいかといえば、筆者の推測では必ずしもそうはいえないように思われる。1950年代に始まる革新は、ピアジェのような例外を除いて必ずしも新しい創造をなしとげたわけではなく、むしろ前代のパラダイムに対するアンチテーゼとして目ざましかったようにみえるからである。多くの研究者が安定を享受すると同時に何とない不満を感じているのは、その辺りに由来しているのではなからうか。さらに、折角のいくつかの革新的業績も十分に総合されたというには程遠く、その意味では局部的貢献に止まっている。これらの点で、筆者には今や力強い積極的な発達研究のパラダイムが再び待望されているように思われる。

#### 話題提供要旨

岩立志津夫

OHP を使用して次のような点について述べた。

##### 1 パラダイムの検索とは何か?

「パラダイムの検索」はある特定のパラダイムの存在を仮定しているかもしれない。しかし、パラダイムは時代とともに変化する。15年近い自分の研究を振り返っても、少しずつパラダイムを変化させて来ている。「パラダイムは結局時代精神の影響をうける」と大げさな表現を使うことも可能だろう。したがって、パラダイムに振り回されないためには、最良のパラダイムを探す努力とともに、どのパラダイムも流動的なものであるという覚めた